

宮野遺跡

2001年3月

大阪府教育委員会

はしがき

宮野遺跡の所在する門真市は、大阪府の東北部、淀川が形成した沖積地に位置します。古来から水害に見舞われやすい低地帯でしたが、『古事記』や『日本書紀』に記載のある「茨田堤」の築堤をはじめ、人々は常に洪水と戦いつづけてきました。大和川が現在の位置に付け替えられる近世まで、深野池や新開池など多くの池沼が存在していました。しかし一方でこの地は京・大坂間を結ぶ交通路が通過する要地でもあり、鎌倉時代には荘園が存在したという文献資料が残っています。

今回の宮野遺跡の調査ではこのような開発の跡をうかがわせる鎌倉時代の遺構や遺物を発見することができました。洪水の危機にさらされながらも土地を開発していったのはそれだけこの地が重要であったからだと思われます。

このような調査成果を積み重ねることにより、地域の歴史像が明らかになりさらに豊かになっていくと共に、文化財の重要性を一層認識していただく一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました関係諸機関ならびに関係各位に感謝申し上げますと共に、今後とも文化財保護行政に一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成13年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 小林 栄

例　　言

1. 本書は、府営四宮鉄筋住宅建替え建設工事に先立ち実施した門真市上島町所在宮野遺跡発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪府建築都市部の依頼を受け、大阪府教育委員会文化財保護課が技師藤山道子を担当者として実施した。
3. 現地調査は、平成12年10月から平成13年1月まで行い、出土資料等の整理作業は一部現地作業と並行して行い、平成13年3月に終了した。
4. 本書の執筆・編集は藤田が行った。
5. 本調査の写真測量は、株式会社ウエスコに委託した。なお、撮影フィルムは株式会社ウエスコで保管している。

本　文　目　次

第1章 はじめに

　　第1節 調査に至る経過..... 1

　　第2節 調査の方法..... 2

第2章 位置と環境

　　第1節 歴史的環境..... 2

　　第2節 既往の調査成果..... 2

第3章 調査成果

　　第1節 基本層序..... 3

　　第2節 主な造構と遺物..... 7

第4章 まとめ..... 13

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過（第1図）

大阪府建築都市部は、老朽化の激しい府営住宅を土地の有効利用及び環境改善のため中・高層住宅に建替える計画を推進している。昭和30年以前に建設された門真市上島町に所在する府営四宮鉄筋住宅においても建替え計画が持ち上がった。当該地は宮野遺跡隣接地にあたり、建替え計画に伴い本府建築都市部から依頼を受けた大阪府教育委員会は、平成9年度に第一回目の試掘調査を実施した。試掘調査の結果、府営四宮鉄筋住宅敷地内の南西部には、現地表面から約40cmほどの比較的浅い深度に遺物包含層が存在し、宮野遺跡が東側の府営住宅の敷地内まで広がっ



第1図 調査地点と周辺遺跡図 ($S=1/25,000$)

ていることが確認された。

平成10年度には、前回の試掘調査でトレチを入れることができなかつた府営住宅敷地内北部の試掘調査が行われた。これらの試掘調査の結果に基づいて、本府教育委員会は府営四宮鉄筋住宅の敷地内約南半分は、建替えに先立ち発掘調査を実施する必要がある旨を、本府建築都市部に伝えた。その後、本府教育委員会は本府建築都市部と協議を重ね、平成12年度に調査依頼を受け発掘調査を実施することとなった。発掘調査面積は1307m²、調査必要範囲の北部に当たる。

第2節 調査の方法（第2図）

現場作業は盛土、旧耕土を重機により掘削し、それ以下の方層は一層ずつ人力により掘り下げ精査した。航空測量の基準は国土座標を使用し、標高はT.P.を使用した。出土遺物については、洗浄、注記を行い可能な限り実測・復元作業を実施した。現場作業は平成12年10月に開始し、平成13年1月に終了した。整理作業は現場作業を併行して行い、平成13年3月にすべての作業を終了した。

第2章 位置と環境

第1節 歴史的環境

主に文献資料から宮野遺跡の周辺を記述する。

宮野遺跡は門真市の北東部にあり古川と寝屋川の間に位置している。『古事記』・『日本書紀』に伝承されている茨田の堤とされる堤防状遺構は、現在も門真市宮野町に残りその一部は大阪府指定文化財の史跡となっている。

今回の調査地である府営四宮鉄筋住宅が所在する上島町は明治22年までは上島頭村という名で呼ばれていた。この島頭という地名がはじめて文献に現れるのは平安時代末である。『勸修寺家文書』によると鎌倉時代末期島頭庄は勸修寺家領の莊園であった。伝茨田の堤のある大和田付近は人和田庄として平氏一族であった池大納言家の所領であった。門真市域でも京阪沿線に沿った地域は比較的標高が高く、早くから莊園として開発されていた様子がわかる（注1）。

南北朝時代から室町時代になると、島頭庄は、大和田庄など周辺の莊園とあわせて北野社の社領となり、河内八ヶ庄と呼ばれるようになる。河内八ヶ庄の範囲は古川から深野池西岸に至る広大な範囲を含んでおり、地域名称として江戸時代にも引き継がれている。

第2節 既往の調査成果

宮野遺跡は昭和35年京阪電車大和田駅近くの道路建設工事の現場で遺物が出土したことにより発見された遺跡である（注2）。このときの発見では遺構は発見されなかったものの、古墳時代の土師器、須恵器の他、鎌倉・室町時代の瓦器椀、土師器が多量見つかっている。この発見は門

真市における初めての遺跡発見であった。

昭和38年には大和田駅構内で弥生時代の銅鐸が3点発見された。この銅鐸の出土地点は大和山遺跡と呼ばれているが宮野遺跡の一部になる。

昭和55年には茨山の堤の推定地に隣接した場所で大阪府教育委員会による発掘調査が実施された（注3）。これは門真市における初めての本格的な発掘調査となった。調査の結果堤にそうちで室町時代前半に築造された木組みが発見され、これは伝茨山の堤を補強するものと考えられている。また木組みの上からは土師器の皿が多数発見されており、木組みを造る時に祭りを行ったのではないかと推定されている。このときの調査では茨山の堤を築造した時代とされる古墳時代の遺物を含む土層も発見されているが、遺構は検出されていない。

（注1）中世文献資料については『門真市史 第2巻』（平成4年3月）による。

（注2）江谷 寛氏により『門真町史 第十四章 特殊研究』（昭和37年3月）に報告されている。

（注3）『宮野遺跡発掘調査概要』門真市教育委員会（1982）

第3章 調査成果

第1節 基本層序

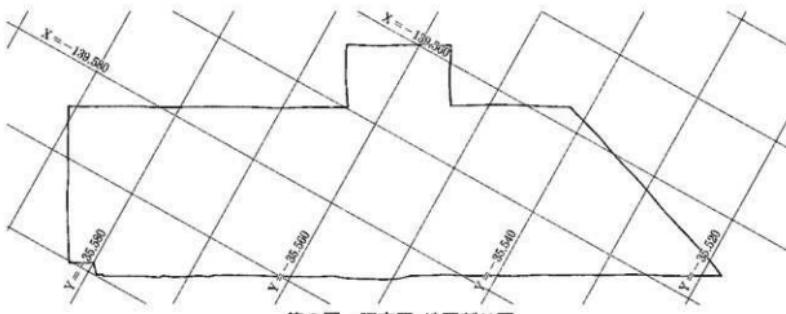
調査区には府営住宅やそれに伴う埋管によるカクラン坑が多数あり、層序が連続して認められるところが少ない。南壁断面の一部と、西壁断面から基本層序を説明する（第3図）。

第1層 盛土、整地層。 現在の府営住宅建設時の盛土、整地層である。

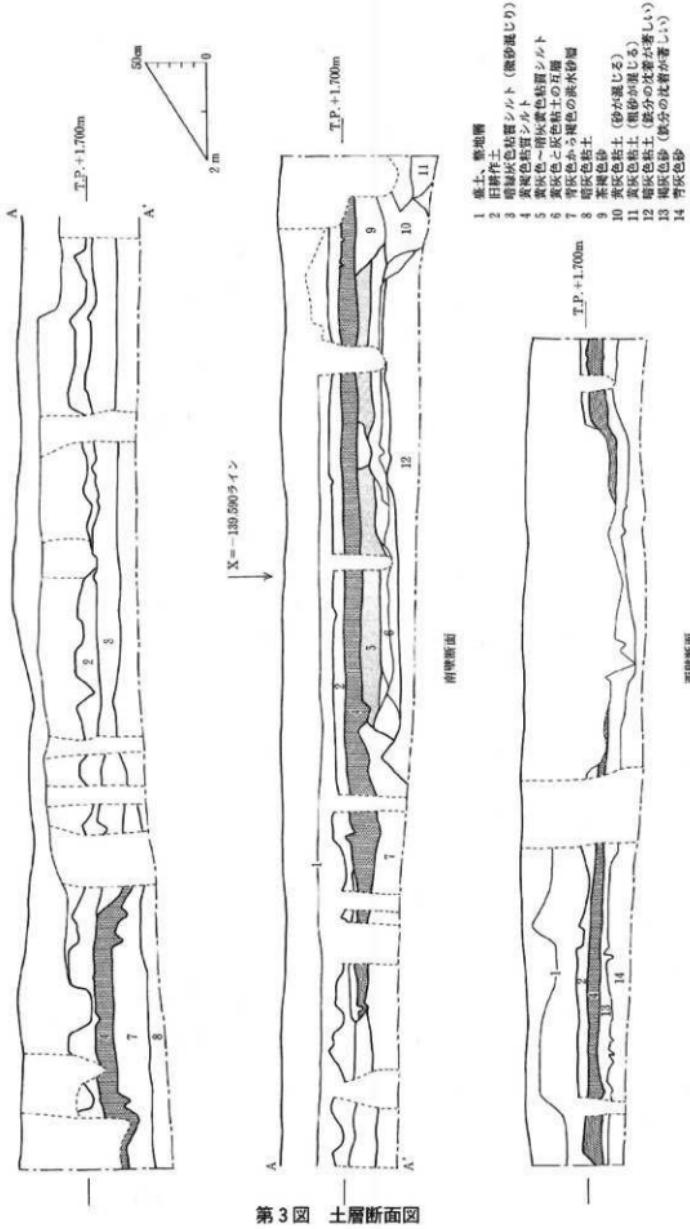
第2層 旧耕作上。 調査区の全域に存在する現在の耕作土。

第3層 暗緑灰色粘質シルト（微砂まじり）。調査区の中央より西側に堆積する。層厚さは20cm。

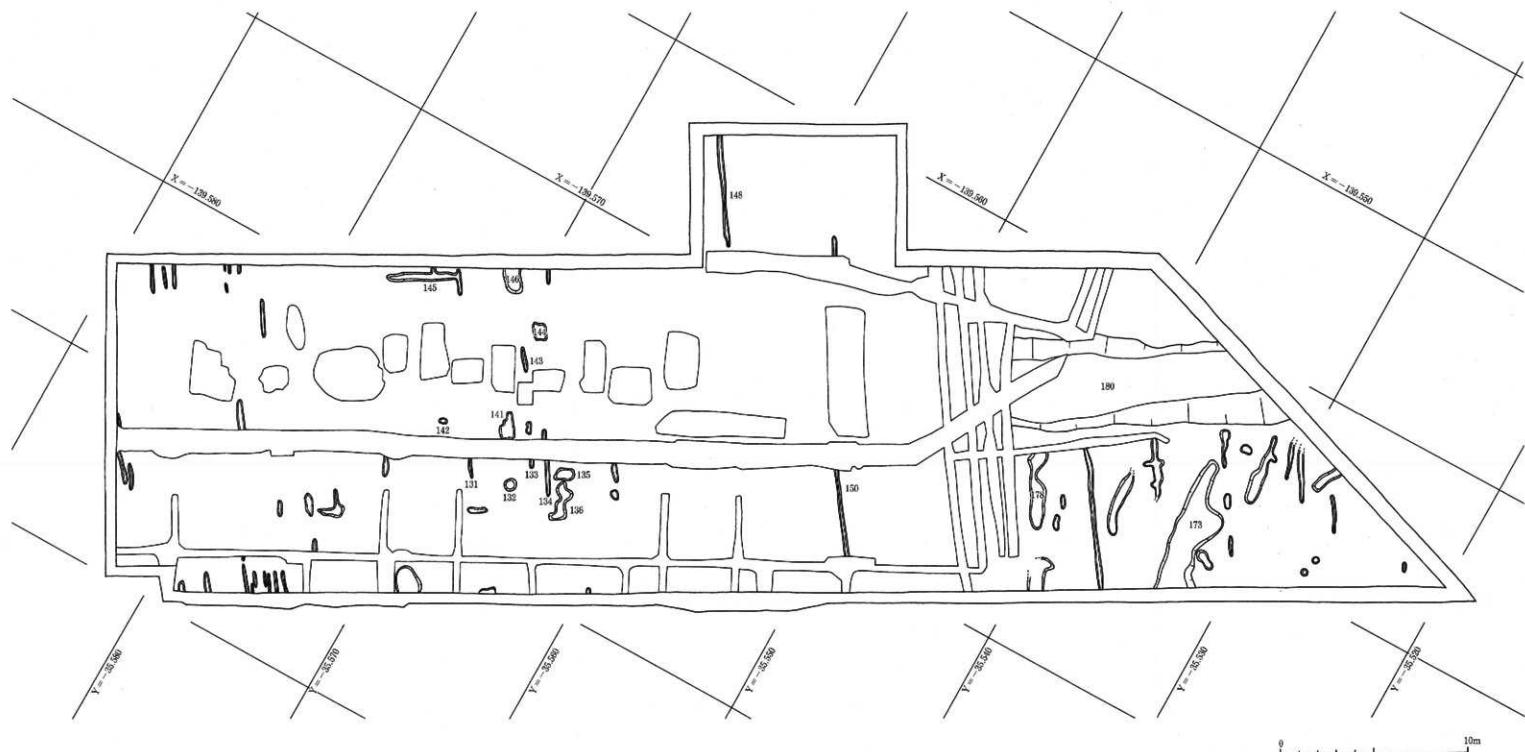
第4層 黄褐色粘質シルト。 調査区のほぼ全域に堆積する。層厚さは10～20cm。瓦器、土師器を含みこの層を除去した段階で第1面を検出した。



第2図 調査区 地区割り図



第3図 土層断面図



第4図 第1面遺跡平面図

- 第5層 黄灰色～暗灰黄色粘質シルト。調査区中央部分に約10mに渡り堆積する。層厚さは20cm前後。瓦器、土師器を含みこの層を除去した段階で第2面を検出した。
- 第6層 第5層の下層に堆積する。黄灰色と灰色粘土の互層。層厚さは20cm。
- 第7層 青灰色から褐色の洪水砂層。調査区の東側ではラミナがはっきり確認できる場所もあり一時期流路となっていたと思われる。
- 第8層 暗灰色粘土。調査区ほぼ全域の下層に堆積する。
- 第9層 茶褐色砂。
- 第10層 黄灰色粘土(砂が混じる)。
- 第11層 黄灰色粘土(粗砂が混じる)。
- 第12層 暗灰色粘土。第8層の粘土とつながるものと思われるが上層の影響を受けて鉄分の沈着が著しい。
- 第13層 褐灰色砂。第7層の砂とつながるものと思われるが上層の影響を受けて鉄分の沈着が著しい。
- 第14層 青灰色砂。

第2節 主な遺構と遺物

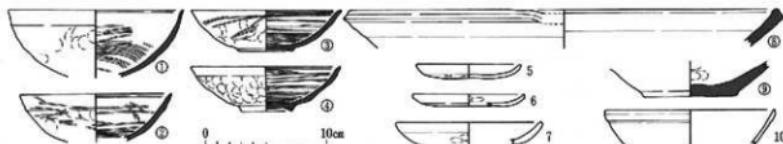
(1) 第1面

第3層の暗緑灰色粘質シルト、第4層の黄褐色粘質シルトを除去した段階で検出した。調査区中央では第5層が、西端では第9層の褐色砂がベース土となる。調査区東側では一部第3、4層がなく、第7層の流水堆積層の上面を第1面としたところもある。検出面のレベルはT.P. 1.6m前後である。

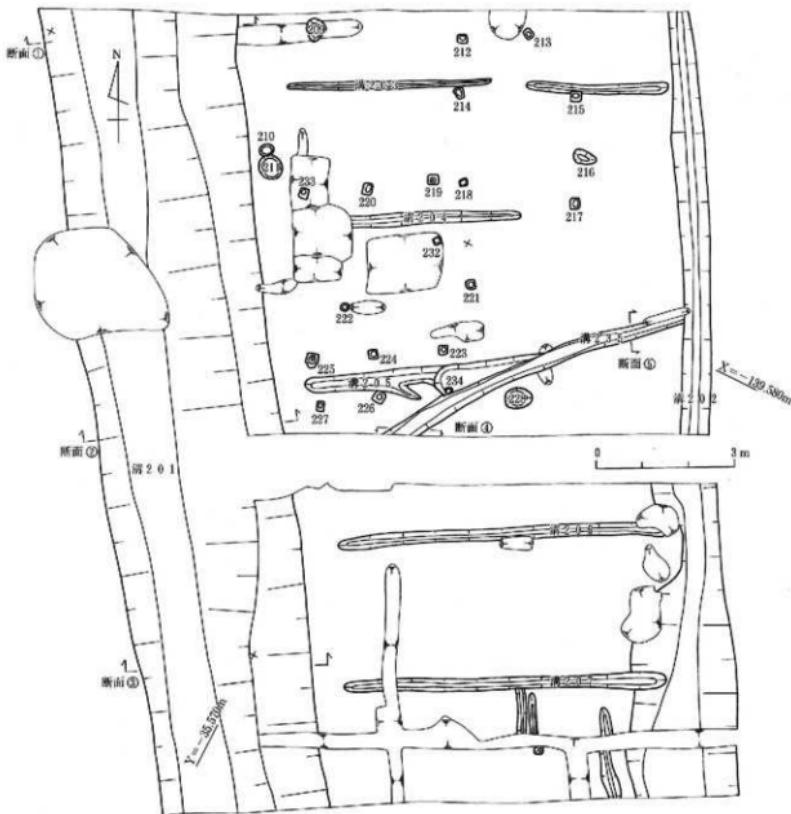
第1面では、調査区の西側で耕作に伴う鋤溝群、中央部分で土坑などを検出した(第4図)。これらの土坑のうち132、135、136等の掘削断面は検出面から垂直に掘り込まれており、鋤状の工具等の使用が想定される。いずれの土坑からも瓦器や土師器の小片がごく少量出土した。

第5図は3、4層からの出土遺物である。13世紀代の瓦器碗が出土している。

第1面の遺構群はいずれも耕作に伴うものであり、土層の前後関係、遺物から考えて中世以降に掘削されたものであろう。



第5図 出土遺物実測図(1)(数字の丸囲みは瓦器、瓦質土器)



第6図 第2面 遺構平面図

(2) 第2面

調査区の中央西より、第5層の黄灰色～暗灰黄色粘質シルトを除去した段階で検出した。東西幅約1.5mでの検出である。検出面のレベルはT.P. 1.4m前後である。第2面では掘立柱建物の柱穴、溝などを検出した(第6図)。

遺構の前後関係を整理すると、最初に耕作溝203～207が掘削される。次に掘立柱建物が建てられ、最後に溝201、202、235が掘削される。

耕作溝203～207 いずれも断面U字型の浅いものである。約3mの間隔をあけ平行に並んだ状態で検出した。遺物はほとんど出土しなかった。

ピット209～234 ほとんどのピットは掘方の平面形は方形で、整然と並んだ状態で検出

した。第1表はその一覧表である。柱根の痕跡が見られるものも多く、おおむね直徑が8~10cm程度の柱材であったと思われる。

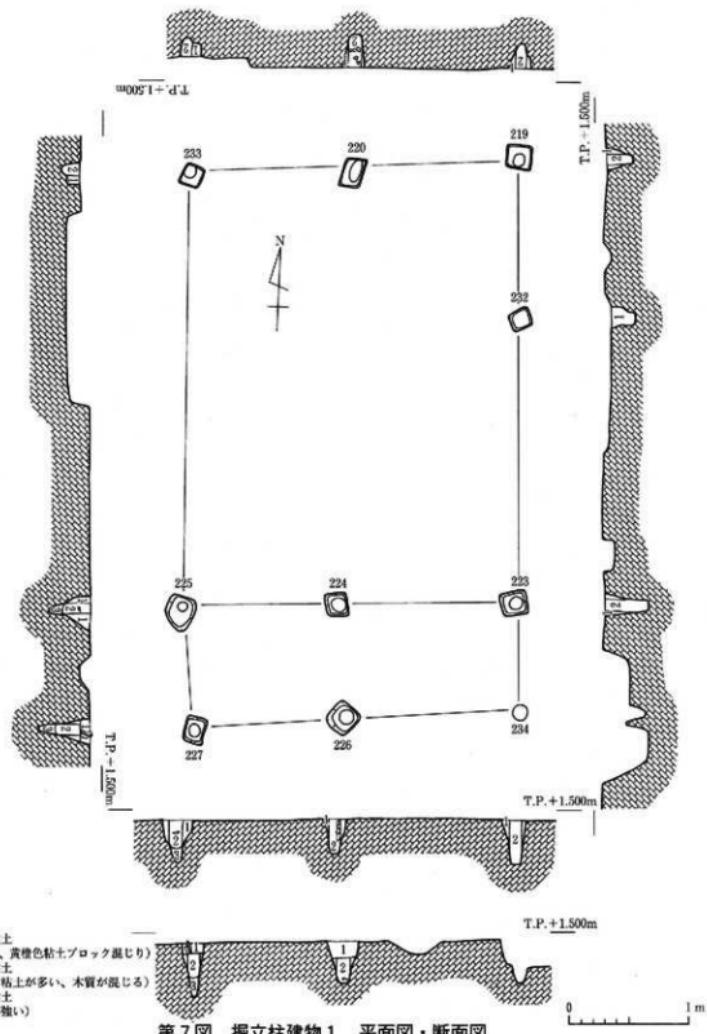
ピットNo.	掘方の長辺×短辺	検出深さ	備考	
214	26×22	39		
215	25×23	33		
217	24×18	36		
218	18×18	20		
219	20×20	21		建物1
220	26×18	28	柱根の痕跡が残る。	建物1
221	22×18	25		
223	20×20	37		建物1
224	20×19	29	柱根の痕跡が残る。	建物1
225	28×18	35	柱根の抜き取り跡から瓦器碗が出上	建物1
226	26×24	35	柱根の抜き取り跡から瓦器碗が出上	建物1
227	22×18	40	掘り方から羽釜、瓦器碗が出上	建物1
232	20×18	21		建物1
233	20×18	16		建物1
234	不明	14		建物1

第1表 ピット一覧表

建物の柱材としては若干細いという疑問もあるが長方形に並んだピットから1棟の掘立柱建物を復元した。

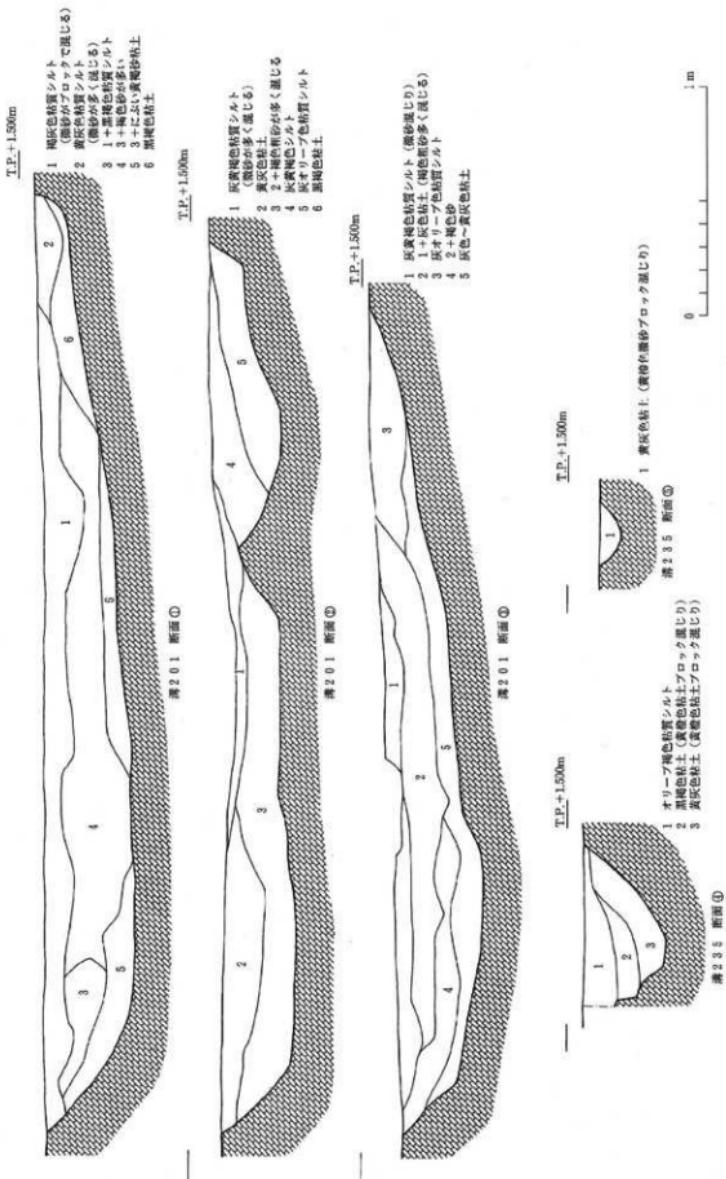
掘立柱建物1（第7図） 調査区北側に位置する東西2間(2.8m)×南北2間(4.6m)、南側に1間の庇を持つ。西側は上層の第9層により削平されている可能性があり、建物の規模は西側に大きくなる可能性がある。ピットNo.225~227からは遺物が出土している。第9図1~6はピット227からの出土遺物である。1~3は瓦器碗、4は土師器皿、5は十鍋口縁、6は土師器羽釜である。瓦器碗の編年から見て遺物の時期は12世紀前半と思われる。

溝201（第8図） 掘立柱建物の西北に検出した幅3~4mの大溝である。第2遺構面は溝201より西南部はベース上が砂となり遺構は検出されなかった。検出最大幅4mで、北西から東南方向に流路をとる。建物側の溝肩附近から遺物が多く出土した。第9図1.3~3.5はその一部である。1.3~1.9は土師器皿他である。2.0は瓦質のすり鉢、2.1、2.2は土鍋の口縁部である。2.3は瓦器小皿、2.4~3.3は瓦器碗である。3.4は白磁の高台部分、3.5は甌の一部と思われる破片である。瓦器碗の編年から見て遺物の時期は12世紀前半~中葉と思われる。

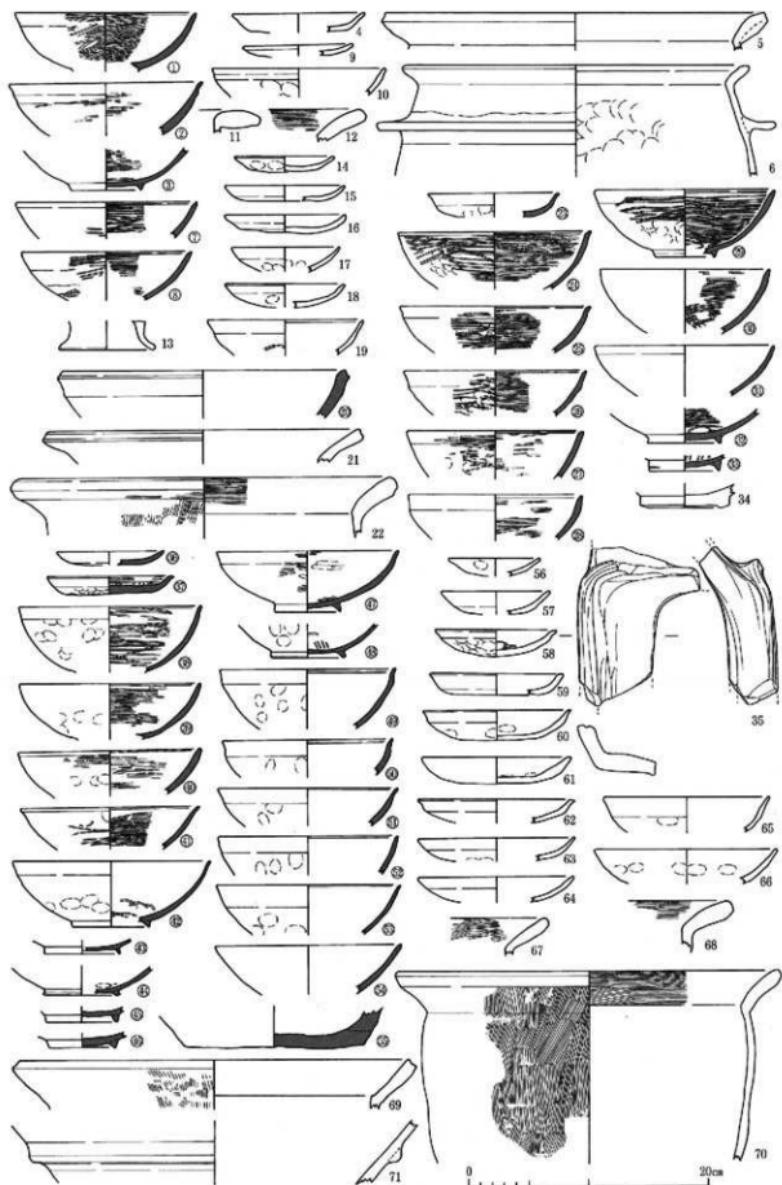


溝202 第2遺構面の東南限の溝である。第2遺構面は溝202より東南部はベース土が砂となり遺構は検出されなかった。検出幅約50cm、北西から東南方向に流路を取り、溝201と平行している。遺物はほとんど出土しなかった。

溝235(第8図) 第2遺構面中央付近で検出した。他の遺構と唯一方向を異にしている。検出幅約40cm、埋土は灰褐色土と黄褐色土のブロック混じり土である。第9図7~11は出



第8図 溝201・235 土層断面図



第9図 出土遺物実測図（2）（数字の丸囲みは瓦器・瓦質土器）

上遺物の一部である。7、8は瓦器碗、9、10は土師器皿、11、12は土鍋の口縁部である。瓦器碗の編年から遺物の時期は12世紀前半代に相当すると思われる。

第2構造面を覆っている第5層の黄灰色～暗灰黄色シルトからも遺物が出土した。第9図36～71はその一部である。36、37は瓦器の小皿、38から54は瓦器碗、55は瓦質土器、56～66は土師器皿、67～70は土鍋である。71は摩滅を受けているが、朝顔形円筒埴輪の破片である。瓦器碗の編年では12世紀前半～中葉に相当するものと思われる。

第4章　まとめ

調査区一帯はもともと地下水位の高い湿地状の土地、いわゆる後背湿地であったが、12世紀前後からやや地盤の高い場所を選び居住地や耕作地として開拓されていったと思われる。

第2構造面のベース土の粘土が薄い水平堆積を重ね、細かく分層できるのは土砂を入れ整地した痕跡を示しているのかもしれない。しかし一時的に建物が存在しただけで、その後は洪水に見舞われ再び湿地化していったようである。このような低湿地にもかかわらず開発が進められたのはこの地が京と大阪を結ぶ要地であったからである。これまで門真市内の中世の遺跡からは明確な建物跡が検出されていなかったので、いささか断片的ではあるが空白を埋める資料となると思われる。

調査区内で検出された建物跡の方位、第1、2面両面で検出された溝の流路はすべて同じ方向を取っており、しかもすべて正南北からずれている。現在の町並みの地割とも異なる。この方向は何によって規制されたものか今後の検討課題が残ったが、今後の資料の増加を願って終わりとしたい。

報告書抄録

ふりがな	みやのいせき
書名	宮野遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	200-8
編著者名	藤田道子
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL06-6941-0351
発行年月日	2001年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
宮野遺跡	門真市 上島町	27223	5	34° 44' 26"	135° 36' 44"	2000年10月 2001年1月	1307m ²	府営四宮 鉄筋住宅 建て替え 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮野遺跡	集落	鎌倉時代	掘立柱建物、 柱穴、溝、土坑	瓦器、土師器	

図版



ピット 220 柱根検出状況



ピット 224 柱根検出状況



ピット 225 遺物出土状況



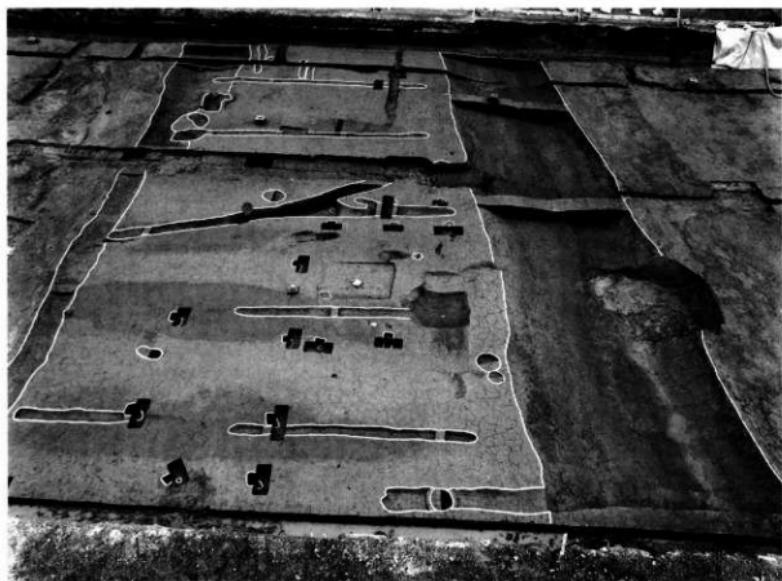
ピット 227 遺物出土状況



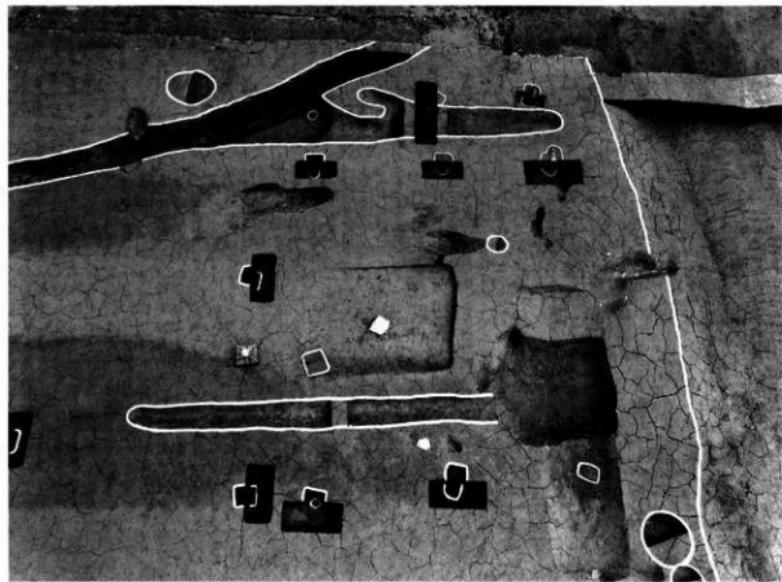
第1面 全景(東から)



第1面 中央部遺構検出状況

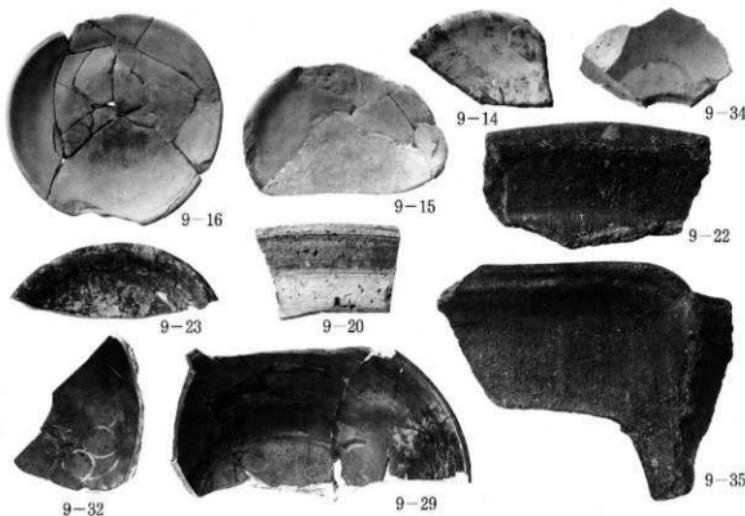


第2面 全景（北から）



掘立柱建物 1（北から）

図版
3



溝 201 出土遺物



ピット 227 出土遺物

第 5 層 出土遺物

※番号は捕獲番号と対応

大阪府埋蔵文化財調査報告 2000-8

宮野遺跡

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571

大阪市中央区大手前2丁目

TEL. 06-6941-0351

発行日 2001年3月

印刷 サツキ印刷株式会社

TEL. 072-828-0171

